
深緑と深紅の渴望

湖面の月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

深緑と深紅の渴望

【Nコード】

N5072Y

【作者名】

湖面の月

【あらすじ】

「正義とは、自分の信じる道こそが正義である」
「故に、正義は善ではない」
「正義は、悪でもあるのだ」

新設部隊機動六課へ配属された二人の魔導師。
彼女達が紡ぐ、魔法少女の物語。

新設、機動六課（前書き）

今日出掛けでふと思い浮かんだ（妄想とも言う）設定で連載を始めました。

続くかどうかは期待しないでください。

後、言うとしたらランスター兄妹アンチになる・・・のかな？

新設、機動六課

「お姉ちゃん……」

「ん？どうしたのアシユリー？」

私と同じ深緑の髪を揺らしながら、間延びした声で彼女は問う。珍しく夕方に帰ってきてくれた彼女は、今は仕事着の上からエプロンを着て、夕飯の支度をしている。

私と姉さんに親は居ない。いや、この世に生まれてきた以上、『親』と呼べる存在は居るだろうが、少なくとも私と姉さんは、両親からの愛情を受けた記憶は無い。物心ついた時から、私の肉親は姉さんだけで、私達が帰る場所は孤児院だった。

「今度は、何時帰ってくるの……？」

「ああ……ええつとねえ……」

私の質問に、姉さんは口調は変えず、しかし答えずらそうに口を開く。

姉さんは、凄腕の魔導師だから。魔法を悪用する犯罪者や、魔法によって引き起こされる戦争を止める事が、姉さんの仕事だから。そんな姉さんの事が、大好きだったから。

頭の中では、理解しているつもりだ。でも、やっぱり納得はいかなかった。

今姉さんが追っている事件は、違法魔導師の追跡だ。「長年行方

を暗ましていたが、ようやく足取りが掴めた」と“彼”は言っていた。ただ、向こうも其れは感じているだろうとも。

「アシュリー？」

「……置いて行っちゃ……嫌だよ……」

不安に駆られた私は、無意識に姉さんの背中に抱き付いていた。そうしなければ、姉さんが今にでも、消えてしまいそうで。

たまらなく、不安だった。

「だ〜いじょうぶっ！！お姉ちゃんはアシュリーを置いてけぼりになんて絶っつつ対しないから！！」

「本当……？」

「ホントホント！！だから、ね？」

泣きじゃくる子供をあやす様な調子で、姉さんは私の頭を優しく撫でてくれた。

その暖かい手の平が、愛おしくて。私は姉さんの手を頬に当てて、名残惜しむように抱きしめた。

それを見た姉さんが、ふざけて私をハグしてくれて。

あんなに、暖かかったのに。あんなに、笑っていられたのに。

その時のこびり付く様な不安を、拭い去る事が出来ないまま、姉さんは出かけてしまい。

結局、姉さんは帰ってこなかった

）

「　　りー。アシユリー！！」

「んう・・・？」

名前を呼ぶ声がして、私は瞼を擦った。
気付いてみれば、先程までの心地よい振動も、いつの間にか止まっている。

「・・・着いたのか・・・？」

「ああそうだよ。さ、部隊長さんにも挨拶しなきゃいけないんだから、早く降りた降りた！」

隣の女　ハンナ「スクリーリッジに急かされ、私は幾度か体を解しながら、サイドカーから降り、被っていたヘルメットを外した。目の前に映るのは、真新しい作りの施設。

「ここが、機動六課・・・」

「そう、アタシ達の新しい配属先ね」

隣でハンナがライダースーツの変身を解除しながら、私の呟きに律儀に返す。

「さあ、行こう！アシュリー！！」

「ああ」

楽しそうに呼びかける彼女に続いて、私は一步を踏み出した。

新設、機動六課（後書き）

・・・はい、いかがだったでしょうか？

いやこんなちよろつとでいかがもクソも無いですよ。すいません。

前述のとおり、このお話はぼつと出で思いついた設定です。見掛け
倒しです。穴だらけです。

ああこんな話もあったな程度に覚えていただけたら幸いです。

ではでは〜

配属、魔導師二人（前書き）

はい、続きましたよ第2話。

やっぱりはやての口調が一番迷います。このエセ関西人が！！

・・・はい、失礼しました。

いやね、関西弁バリバリなお嬢様とかならもっと書きやすいんですけどね。中の人的な意味で。て言うかあの二人パツと見めちやくちや似てない？

では、どうぞ〜

配属、魔導師二人

「ん……」

二枚の書類を手にとって、私は少しばかり頭を悩ませていた。

デスクの上には、既に封を切った茶封筒。メールでのやり取りが多い中で、こういう実物が送られてくるというのも珍しい。もつとも、重要な文献や書類なんかは、確かな形として残しておかなければいけないから、当然と言えば当然なのだが。

そう。詰まる所、これはそう言うモノなのだ。

「はやてちゃん？どうかしたですか？」

「ああ、リイン……」

フヨフヨと飛びながら、私の融合騎　　リインフォース^{ツウファイ}が肩に降り立つ。

小さな体で書類を覗き込む姿はとても可愛らしく、見ていて癒されるものがある。が、それだけでは解決しないのが現状であった。

「これって、魔導師の書類ですか？」

「そう。今日うちにくる魔導師二人の書類」

リインの疑問に答えながら、デスクの上に2枚の書類を置いた。

「この二人がどうかしたんですか？」

「リイン。その二人の経歴と資格、よう見ても？」

促されたリインが、書類に目を通す。

「えっと・・・執務官資格に・・・教導官の資格まで！？あ、デバイスマスターの資格もあります！！！」

「しかも二人共や。で、それから経歴の方」

「・・・あれ？二人とも5年位ポツカリ穴が空いちやってますよ？」

そう。この書類によれば、なぜか二人とも訓練校を卒業してからの5年間、経歴が空白なのだ。それぞれが前に所属していた部隊の隊長にも掛けあったが、どちらも「詳しいことは本人に聞いてくれ」といまいち要領を得ない解答だった。

「誰の推薦なんです？」

「・・・ミゼット・クローベル」

「さ、三提督からですか！？」

おまけに、推薦状は管理局黎明期の功労者として名高い、『伝説の三提督』の一人、ミゼット・クローベル統幕議長なのだ。非公式で協力を申し出てくれるとは言え、まさか直々に推薦状まで出してくると思ってもみなかった。

「まあ、人員が増えるのは嬉しい事なんやけど・・・」

「・・・まだ、何かあるんですか？」

渋る私に、不安げにこつちを見るリイン。

「いや・・・何か引つ掛かるんよ」

「その根拠は？」

「勘」

「勘ですか・・・」

部隊長という役柄か、ここまで上手くいき過ぎる状況は、逆に不安の種になる。皆の命を預かる立場としては、仕方がない様に思える。

が、どうも返答内容は、リインの納得のいくモノじゃなかったらしい。若干呆れ気味な視線が痛い。

「ま、まあ、あんまり疑っててもしょうがないし。そろそろ来る頃やから・・・」

それから数分後。噂の彼女達が到着する

~~~~~

「本日付で機動六課に配属となったモノです。部隊長に挨拶したいのですが」

彼女は目の前の扉に向けて、そう言う。先程までの案内人によれば、ここが部隊長室らしいのだが。

「どうぞ」

中からの返答を受け、彼女ともう一人は中へと入った。

室内に居たのは、執務用デスクに向かっていた女性。恐らくは、先程の声の主は彼女だろう。

「わざわざ御苦労さま。私が機動六課の部隊長、八神はやてです」

席を立ってこちらに歩み寄りながら彼女　八神はやては微笑みかける。

「はっ。本日よりこちらへ配属となりました。アシュリー＝クロイツェ二等陸尉であります」

「同じく、ハンナ＝スクーリッジ一等空尉であります！よろしくお願ひします！！」

はやてに向かい揃って敬礼をするアシュリーとハンナ。

「うん。こちらこそよろしくや。それから、あんまり堅苦しい喋り方せんでもええよ?」

「いえ、あくまで私達はあなたの「本当ですか!?!いや」あたしことう言っ喋り方慣れて無くって」……」

ハヤテからの提案に反論しようとしたアシュリーは、しかし速攻で崩して喋り始めたハンナによって遮られた。

「フンっ!!!」

「あ痛あッ!?!」

ハンナの腰目掛けて、アシュリーがミドルキックを叩きこんだ。堂に入った良い蹴りだった。見てる方が痛くなるくらいに。

「ちょ!?!いきなり何すんのよアシュリー!!!」

「ハンナ、少し黙ってる」

蹴られた腰を擦りながら涙目でアシュリーを睨むハンナ。対するアシュリーは冷徹にバツサリと切り捨てる。そんな二人に苦笑しながら、はやてが仲裁に入った。

「ま、まあまあ……。私も、あんまお堅いのは嫌いだから、そんなくらいでもかまへんよ?」

「いいえ。私は貴方の部下で、貴方は私の上司。ハンナはしょうがないとして、私は変えるつもりはありません」

「うつ……」

アシュリーの意見に言い返そうとは思ったが、彼女の切れ長な瞳に気圧され、はやては言葉を詰まらせる。

宝石の様に澄んだ碧色の瞳は、しかし氷のように冷たい視線を放ち。彼女の左目にある、顔半分を覆うような大きな黒い眼帯が、ソレを助長させていた。

「と、とりあえず！二人はこれから機動六課の一員やから、そこんところ、よろしく願いますわ」

「解りました」

「はい」

バラバラな返事の仕方を聞いて、はやては頭を悩ませていた。

一部不明な経歴を持った、3つ以上も資格を持つ、『凸凹コンビ』の様な二人の魔導師。

果たしてこの二人は自分の部隊にどういふ影響を齎すのか？ある意味先ほどの不安は的中したのかもしれない。

「えと、今から訓練所に居る他の隊長と、フォワードメンバーにも紹介するから、付いて来てや」

とりあえずは顔合わせ。アレコレ深く悩むのはそれからだと、はやては断じ。

訓練所に向かうべく、部隊長室を後にした。



## 配属、魔導師二人（後書き）

・・・はい。いかがだったでしょうか？

あれだ、私群像劇って苦手だ。なまじ演劇部だったから誰かが動いてない状況って違和感感じてしょうがないです。実質後半リインは動いてなかったしね・・・。

あれですよ、リインは自分の仕事を片付けに行ったりしたんですよ。そう言う事にしといてくださいお願いします。

さあ、次回はいよいよメインキャラ達との対面だ！！・・・まじキツイ。

ではでは

対決、魔導師二人（前書き）

はい、どうも白眉です。

思い付くうちに投稿します第3話。

もうあれです、気が向いてる時にしか描けそうにない。

なのでこっちの熱が冷めるまでは他の更新は出来ないかもです。

では、びんごう〜

## 対決、魔導師二人

「もう一度説明するけど、勝利条件は相手が降参するか、戦闘続行不可能と判断するまで。皆、4対2だからって油断しない様に」

「……はいつ!」「」「」

「アシュリーさん達も、それで良いかな?」

柔らかい笑みを浮かべて、彼女はこちらに問いかける。  
良いも何も、この流れでは断り様がないだろう。

「わかりました!」

「……了解」

ハンナはお気楽だし。

まったく……どうしてこうなった?

〳〵遡る事数分〳〵

訓練所までの廊下を、誘導してくれている八神二佐に続いて歩く、私とハンナ。

ここ機動六課は、湾岸部に位置している事もあつてか、訓練所の場所は屋外となっている。その為、部隊長室から訓練所までは結構な距離がある。

つまり何を言いたいのかと言えば、私達3人の間に妙な沈黙が続いている訳だ。

私から話す事が無いのは当然のこと、ハンナは先程「黙れ」と言つた事を珍しく遵守しているのか何か喋り出す気配も無い。先行している八神二佐も、背を向けてそれっきり。

耐えられないのかと聞かれれば違つと答えるだろうが、時折すれ違つ他の局員からは奇異の目を向けられる。

見世物では無いのだから、ジロジロ見られて良い気はしない。話す様な話題でもあれば気も紛れるだろうが、先程言つた様にそんなものは無いのだ。どうしようもあるまい。

「ああ、そうそう。今のうちに二人の役割教えとくわ。六課は大体3部隊で編成してる訳やけど、クロイツェ二尉はスターズ。スクーリッジー尉にはライトニングの方に就いてもらうから」

ふと、八神二佐は私達に話題を振ってきた。

「スターズ？ライトニング？」

「そ。なのはちゃん　高町一尉が分隊長を担当してるスターズ分隊に、ハラオーナー尉が分隊長のライトニング分隊。クロイツェ二尉はスターズ5、スクーリッジー尉にはライトニング5を担当して

貰うつもりや」

「所属は解りましたが、役割と言うのは？」

「うん。二人には後方部隊　ロングアーチからの緊急内容の伝令を担当して欲しいんよ」

「緊急内容・・・ですか？」

「私から隊員全員に伝えても良いんやけど、それだと内容が浸透するまで時間も掛かるし各員に繋げて通信すると盗聴される危険もあるから」

つまり私達は伝書鳩らしい。確かに、部隊内に一人くらい伝令役を入れた方が、何かと都合も良いだろう。

「まあ、それはあくまで緊急時で、基本的には他のメンバー同様、前線張ってもらおう事になるわ」

「確か、フォワードメンバーって隊長副隊長を抜いて合計4名でしたよね？どついうのが居るんです？」

「あのなハンナ・・・今から会いに行くんだから聞いても意味無いだろうが」

「ええ、だって気になるじゃん」

そう言って、ハンナは口を尖らせて渋る。

「まあ、クロイツェ二尉の言う通りやし、直接見た方が解りやすい

と思うで？」

苦笑しながら言う八神二佐。対するハンナはと言えば、「はい・  
・。」と若干気落ちしたようだった。

~~~~~

で、それから屋外訓練所に着いた私達は、八神二佐が一時召集を
掛け、集まった隊員達に自己紹介をした訳だが。

そこで話は私とハンナの実力へとシフトし、何を思ったのか高町
一尉が「だったらフォワード4人と模擬戦してみたらどうかかな？」
と言いだしたのだ。

理由を聞いてみた所「これから一緒に戦う訳だし、お互いの癖や
実力を知るなら模擬戦が手っ取り早い」との事。まあ、確かに実践
経験を積むのは良い事だし、一戦交えてみて解る物があるのも確か
だ。

それに、高町一尉は戦技教導隊の出だ。「あれこれ口で言うより
は、体に叩き込んだ方が双方とも利点が多い」という考えの教導隊
ならば、ある意味納得のいく説明でもある。

「それにしたって、会って早々戦闘とはな……」

異動の際は大概忙しいもので、（ハンナはどうか知らないが）私もそれなりに大慌てだったのだ。一息入れる時間くらい欲しかったのが本音である。

《もしもし、アシユリー？》

「何だ？」

ハンナからの念話。口調がふざけてはいるが、声は既に切り替えられている。

ただの魔導師では無く、戦場に立つ兵士として。どうすれば勝利する事が出来るか。どうすれば、相手を屈服させられるか。そんな戦士の声だ。

もつとも、気紛れな所のあるハンナの事だから、その集中がいつまで続くかは解らない。そう言う奴だ、ハンナ「スクーリッジと言う女は。」

《とりあえず、これからどうする？向こう方は二手に分かれたみたいだけど》

「二人一組による各個撃破・・・まあセオリー通りだな。お互いが担当する分隊の相手をした方が、都合が良いだろう」

《りょう〜かい》

ハンナからの念話が切れる。恐らくはちびっ子二人を探しに行ったのだろう。

差し当たって、私の相手は小娘一人か。

「それじゃあ、状況開始だ」

~~~~~

機動六課屋外に建てられた訓練所。その実態は、海上に建てられた人工島に魔法による投影を利用した大掛かりな陸戦用空間シミュレーターである。

相当な広さを持つ人工島全体を覆う技術も然る事ながら、特筆すべきはその再現力である。

現在投影されている廃ビル群、その一つ一つのコンクリートの質感まで忠実に再現されている。

「試験運用の部隊と聞いていたが、こういうのもその一つなのか・  
・？」

自分の立つ場所を直に触りながら女性     アシユリー・クロイツ  
エは感嘆の声を漏らす。

今の彼女はの姿は、ここに来るときに着ていた局員用の制服からすでにバリアジャケットへと変換されていた。

白いラインの走る黒のロングコートに、四肢に巻かれた灰色のベルト。両手にはブレードの付いた黒フレームの拳銃を構え、周囲を警戒しながら歩いている。

《バディ》

「解っている・・・エグゼクター、魔力充填開始」

《了解》

ある程度進んだ所で立ち止まるアシュリー。拳銃 エグゼクターからの忠告に、神経を研ぎ澄ませる。

「・・・っ!」

突如、前方のビルが爆発する。舞い散る瓦礫と粉塵によって、否が応にも視界が遮られる。

《数5。来ます》

「ちいっ!」

瞬間、オレンジ色の光弾が粉塵を突っ切ってアシュリー目掛け飛来する。これをアシュリーは横に飛んで回避。

「エグゼクター! スロウバレット!」

《All Right・Charge Slow Bullet》

即座に体勢を立て直し、弾丸の飛んできた方向へ銃口を向ける。すると、アシュリーの周りに真珠色の光球が4つ展開される。

「ショット!」

掛け声に合わせ放たれる魔弾。直進する光は残っていた粉塵を吹き飛ばして、その先の標的　ティアナ・ランスターを捉える。

「なっ!?!」

意表を突かれたティアナは、避ける間もなく4発とも直撃を喰らう。

「ティア!?!」

「私は大丈夫だから! あんたはそのまま続けて!?!」

「解った!?!」

別方向から聞こえる安否を問う声に、アシュリーは意識をそちらに向ける。

見ればもう一人　スバル・ナカジマが、アシュリーに向けて攻撃態勢に入っていた。

クロスシフト　ティアナとスバルが得意とする戦法の一つであり、状況に応じて使い分ける事を目的とする。ティアナの弾幕によって移動を制限されたアシュリーに向けて、スバルは必殺の一撃を放つ!!

「一撃必倒!?!」

対するアシュリーは、両腕を胸の前で交差させる。

「P r e s s      P r e s s      F o r m a t t i n g  
圧縮・・・圧縮・・・形成・・・」



意識を向ければアシュリーが、こちらに向かって歩いて来ている。何とか脱出を図ろうとするも、意志に反して全身は鉛の様に重く、態勢を変えることすら叶わない。

「効果は一発につき最大3秒。お前は撃った4発とも直撃したから12秒間だな。効き始めるまでに時間が掛かるのがネックだが、戦場ではこれ以上ない位効果的だ」

止まっている者は絶好の的だしな、と付け加えながら、アシュリーはティアナの前に立ちエグゼクターを振り上げる。

「二人一組と言うのは悪くない案だったが・・・相手が悪かったな。4人掛かりだったら、私でもどうなっていたかは解らん」

雄弁に語るも、その視線は何処までも冷たい。それは、視る者を凍て付かせる強者の目。

「これで、詰みだ」  
チエック

アシュリーは無情に、その刃を振り下ろした。

~~~~~

「おお、向こうもずいぶん派手にやってるね」

さつき聞こえた爆発音から察するに、アシュリーの方はもう戦闘開始したらしい。容赦のないあの子の事だ、多分ナカジマ陸士とランスター陸士は一撃だろう。とりあえずは二人に心の中で合掌を。

「て言うか、そろそろこっちも始めなきゃかなあ……？」

言いながら、前を向く。視線の先にはちびっ子が二人。

槍型のデバイスを構えたマント服の少年 エリオ・モンディア
ル陸士と、ローブと水晶の付いたグローブをつけてこっちを警戒す
る女の子 キャロ・ル・ルシエ陸士。それから、ルシエ陸士の近
くを飛んでる白い竜 フリードリヒと言つらしい。

「……あ、あの……」

「ん？何？」

構えたまま、モンディアル陸士がおずおずと聞いてくる。

「戦わないんですか……？」

「ああ……」

痛い所を突かれたアタシは生返事で答えてしまつ。

そう。アタシ達はまだ何もしてない。とりあえず飛びながら移動してたアタシがこの二人を見つけて、アタシに気付いた二人がデバイス構えて臨戦態勢に入った。

そこまでは良かった訳だけど、ここでふと思った訳だ。この構図って苛めかなんかじゃね？と。

聞けばモンディアルもルシエもまだ10歳程だとか。そんないたいけな少女少女を追いかけ回す2本の刀を持った20過ぎの女ってどうよ？

「どう考えても犯罪者よね……」

《しかし、このままと言う訳にも行くまい？》

渋るあたしを諫める愛機 フォールーン。心なしか呆れた様な
声音だった。

「何よフォールーン。あんたは乗り気だっというの？」

《そうではない。ただ、真面目にやらなければクロイツェ二尉に大目玉を食らうのはマスターだと思っとな。まあマスターが進んで怒りたいというDMだと言うなら止めはしないよ。その代わり、私はマスターとの付き合い方を多少改めなければならんがね》

「ぐっ……」

相変わらずの嫌味な言い方は腹立たしいものの、実際フォールーンの言う通りだ。

向こうの戦闘が終わってアシユリーがこっちに来て、その時まで終わってなければ確実に怒鳴られる。異動して早々、アシユリーから小一時間説教を喰らうのは御免被りたい。

「しょうがない……フォールーン」

《了解した》

私の合図を受けたフォールーンが、鞘のロックを外す。左の籠手から太刀を抜き、腰溜めに構える。

「じゃ・・・行くよ!!」

勢い良く地面を蹴って、一瞬で距離を詰める。姿勢は前傾、モンディアルの正面に躍り出た私は、急停止と同時に、太刀を上段から振り下ろすっ!!

「っ!!」

「ワオ・・・やるじゃん」

《大した膂力だ》

一撃で決めるつもりだったけど、モンディアルはデバイスの柄で太刀を受け止めた。10代とは言えやっぱり男の子か？

《くだらん事を考えるな》

「解ってるっの!ハッ!!」

「うあっ!!」

一瞬拘束を緩め、即座に切り返す。回転の勢いも乗せた下段からの逆袈裟は、態勢の崩れたモンディアルをあっさりと吹き飛ばした。

「エリオ君っ！！」

「ホラホラ、貴方も余所見してる場合？」

「！？キヤアアツ！！」

隙だらけだったルシエへと詰め寄り、一閃。ルシエは咄嗟に防御したものの、保てたのは一瞬。さっきのモンディアルと同じように飛ばされる。

「この人・・・強い・・・っ！」

「当然でしょ？こっちはあんた達よりも先に生まれてるんだから、経験で差が有るのは当たり前よ」

構えを崩しながら、飛ばしたモンディアル達を見る。

さっきの切り合いだけ見れば、この子達に負ける要素は無い。経験も、身長も、力量も。私の方に圧倒的なアドバンテージがあるのは確かだ。よっぼどの隠し玉でもない限りは。

それでも、この子達を見ると、何だか油断ならないのだ。

一撃喰らっただけで、既にボロボロなくせに、二人とも懸命に立ち上がる。その姿は、10歳そこらの子供が持つにはデカ過ぎるガツツだ。

どちらかと言えばそれは、執念と呼ばれる部類だろう。こんな子供のどこに、そんな力があるのか？

「（ちよつと興味出てきたかも・・・）フォールーン、右も外して」

《？気が進まないんじゃないのか？》

「良いの！」

《やれやれ。気分屋なマスターだ》

「うっさいわね!!」

フォールーンを怒鳴りつつ、右の籠手に納まってる太刀に手を掛ける。柄を握り、一思いに引き抜く。陽光を反射する銀の刃、その切先を既に立ち上がった二人の魔導師に向ける。

「ごめんなさいね。アタシ正直、貴方達の事見くびってた」

「ぶつかり合う事で解る事もある」 師匠もそう言った。

ならば、ここはその方法に乗っ取るとしよう。

戦う理由を知ろうとするなら、手加減するのは失礼だから。

「だから、ちよつと本気出すね」

諦めや挫折を未だ知らない、その純粋な瞳の根源を、アタシは知りたい。

故に闘気を燃やし、思考を切り替え、刃を持って語り合う為に。

足裏に“力”を溜める。それらを全て、駆けだすための推進力に。

「すぐに、やられちゃわないでよっ!!」

ひょっとしたらそれは、同類を見つけたことからの好奇心だったかもしれない。

~~~~~

結果から言えば、模擬戦は新参二人の勝利、フォワード4人の敗北という形で終わり。

機動六課は新たな戦力を2名正式に迎え、その活動を開始する事となった。

「で、どうですか？新しい部署は」

《どう、とは？》

質問の意味を、相手は解り兼ねるらしい。首を傾げているのが、モニターに映される。

「いろいろあるでしょう？上手くやっていけそうだとか、楽しくやっていけそうだとか。ただ感想を述べてくれればいいんですよ」

《はぁ・・・》

返事の声は、いまいち要領を得ない。

「？何か問題でもあるのですか？」

《い、いえ・・・そうですね。言うとしたら、仲良し部隊、でしょうか？》

「ほう？それはまた、随分と辛口な評価ですね？」

《部隊員の平均年齢も低いですし、覚悟が足りない部分が多いかと思えます。あくまで他の部隊に比べれば、ですが》

「そうですね・・・解りました。まあ、君達がいる所は試験運用の部隊ですから、それも仕方がないかもしれませんねえ。ですが、戦力としては高水準の者たちが揃っている筈ですから、学ぶ事は多いと思いますよ？1年間、しっかり学んできなさい」

《はっ》

「それでは、頑張ってくださいね？NO・12、アシユリー＝クロイツェ」

《了解です、ボス》

敬礼を確認し、通信を切る。

「機動六課・・・楽しみですねえ・・・」

歯車は、既に動き始めている。ゆっくりと、しかし着実に

## 対決、魔導師二人（後書き）

・・・はい、いかがだったでしょうか？

戦闘については何も言わんで下さい・・・。相変わらず描写がお粗末なのは見逃してください（泣

あ、劇中でエグゼクターを黒フレームの拳銃と書きましたが、実はエグゼクターの形状は「鉄のラインバレル」よりラインバレルの兵装「エグゼキューター」がモデルなんです。

だってあれ他に表現しようがないじゃないですか!!

なのでハンナのフォーローンもラインバレルの腕ですw

ぶつちやけオリキャラのほとんどが武器ラインバレルでした。これ書いてたの鬼帝の剣聞きながらなんだぜ。

ではでは

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5072y/>

---

深緑と深紅の渴望

2011年11月20日17時57分発行